

Ⅱ 医科病院開院の顛末



私が新潟歯学部長に就任した昭和54年（1979）の秋頃から、ようように医科病院のプランが本格的に動きだした。医科病院が主となる7号館は、校地の関屋中学寄りに、附属病院と接続して海側へ直角に建てられる。地下1階・地上4階で、建築面積は408坪（1,346㎡）、延べ床面積1,583坪（5,224㎡）。1階が病院外来、手術室等、2階は病棟、3・4階は医科・歯科の研究室である。

昭和55年（1980）3月20日、7号館の起工式が催されて着工した。8月2日には私は、手術の甲斐なく亡くなった次男高の三回忌の法事をすませる。新館は、9ヵ月の工期をへて、同年12月に竣工した。翌年1月から、院内の医療設備・機器の搬入・設置に入る。事務部長の小田島らは、看護婦（まだ師ではない）をはじめ多数の医療スタッフの採用・確保に懸命だ。

この繁忙を横目でみながら、私は3月初めから毎週末、夜行で新潟—東京を往復した。母親が、がんで病床にあったのだ。

昭和56年（1981）5月28日、開院前に開院披露式をする手順だ。その前々日に母親が逝った。あいにくなことに、葬儀が開院披露式と重なった。私は帰新を諦めて、吉祥寺の実家で忙しく通夜の段取りをしていた。夕方、新潟の小田島から電話が入った。

彼は強ばった声音で、「先生、あした、お願いし

ます」と念押しされた。披露式には、主催者として歯学部長名で、新潟市内の病院長等多数を招待していた。私の事情を知る小田島の直言だ…。

その夜、母親の棺に添い寝し、早朝、私は家内を残して上越線に飛び乗った。長い4時間余、途中、電線に風が引かかって停車した。私は車掌の背に怒り声を浴びせたが、列車は定刻に新潟へ着いた。

本館の応接室に、主賓の猪初男新潟大学長が待っていた。彼は、加藤譲治が私淑する耳鼻咽喉科学の大家である。私が遅参を詫げると、控えめに「どなたがお亡くなりになりに?…」と問われた。私は、返事に窮して痛く口ごもった。

ぶじ披露をすませると、東京へトンボ帰りした。夜半、吉祥寺の寂とした家の中に、線香の残り香が漂っていた。

それから5日後の6月2日、医科病院は開院した。武藤教授との約束から4年が経っていた。同6日に私は、新潟での第74回日本歯科保存学会の特別講演に1時間立った。そのあと9日、目眩におそわれてピカピカの医科病院外来に行く。40歳の過労…即、点滴入院。皮肉にも、私は、医科病院内科の入院第一号となった。

(写真：開院披露で挨拶する猪新潟大学長、右に疲労困憊の中原 泉)